

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：32643

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13025

研究課題名（和文）健康課題へのエンターテインメント・エデュケーションの効果検証と教育プログラム開発

研究課題名（英文）Evaluation of the effects of entertainment education on health issues and development of educational programs

研究代表者

加藤 美生 (Kato, Mio)

帝京大学・大学院公衆衛生学研究科・助教

研究者番号：70769984

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：保健医療課題を取り扱ったプライムタイムテレビドラマの研究状況を文献調査から把握した。視聴者の医師像の認知および医師への信頼度の影響を分析したところ、医療ドラマの外科医の描かれ方によって信頼度を左右する可能性があることが明らかになった。テレビドキュメンタリー番組に登場した患者の語りについてはその重要性が近年認識されつつあることがわかったが、公書や薬害の番組数は種類によって制作数の偏りが見られた。エンターテインメント・エデュケーション実施団体や医療ドラマ制作者へのヒアリング調査により、制作者の制作動機や課題を収集し、メディアと医療をつなぐ会を設立し医療ドラマ制作教育プログラムを実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

エンターテインメント・エデュケーションは一般市民の理解を必要とする健康メッセージを効果的に伝達し、理解向上を図り、行動変容につなげるためのコミュニケーション戦略である。医療ドラマを用いた実証研究により、ドラマの登場人物の認知された表象によって視聴者の信頼度が変化することが明らかになった。このことからドラマ制作者が制作上探究するエンターテインメント性と現実性の均衡を保つことが必要であり、そのために、制作者が医療者とその周囲環境について理解を深めることがよりよい作品作りにつながり、ひいてはその先の視聴者の保健医療に対するイメージをより健康的な行動へとつながっていくことに意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：We found the research trend of the prime-time TV drama dealing with public health issues from the literature survey. An analysis of the perception of the doctor image of the viewer and the influence of trustworthiness on the doctor revealed that the trustworthiness may be influenced by the way the surgeon is presented in the medical drama. It was found that the importance of the patient's narratives appearing in TV documentary programs has been recognized in recent years, but the number of programs regarding pollution and yakugai was unevenly produced. Through interviews with entertainment education organizations and medical drama creators, we gathered the creators' motives and issues, then established an organization called "be creative for health" a community that connects media and medical professionals, and conducted a series of medical drama production education program.

研究分野：ヘルスコミュニケーション

キーワード：エンターテインメント・エデュケーション 教育 テレビドラマ ドキュメンタリー ヘルスコミュニケーション ナラティブ・コンテンツ 健康 脚本家 メディア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

保健医療課題には不特定の一般市民の理解や協力が必要なテーマが多い。健康増進や健康教育では対象者へメッセージを届ける方法として広告やパンフレット配布などが実施されているが、関心の低い人はそもそも見ようとしない。エンターテインメント・エデュケーションとはテレビ番組や映画などのナラティブのメディアを用いて、メッセージを織り込む手法がある。ナラティブメディアでは、メッセージに対する視聴者の抵抗感が最小化され、意図するメッセージが障壁なく届けられると言われている。テレビドラマによる影響として、主に欧米では1960年代から心理・行動の実態及び変化、コンテンツ描写、オーディエンス特性が研究されており、知識の増加、理解の促進、行動意図の向上に影響を与えることが検証されている。米国では、南カルフォルニア大学附属研究センターのひとつの **Hollywood, Health and Society** がエンターテインメント業界プロフェッショナルへの情報提供を通じて、実際にドラマや映画のストーリー内にメッセージを織り込み、その有効性が確認された。一方、本邦では、コンテンツ描写（身障者、喫煙）が研究されているのみであり、テレビドラマの視聴効果は実証されていない。また、作り手への体系的な支援体制も存在していない。

2. 研究の目的

保健医療課題は患者等の当事者以外の一般市民による理解や共感が必要なテーマが多い。一般市民へのコミュニケーション戦略として、エンターテインメント性の高いプログラムに教育的・社会的メッセージを織り込む手法「エンターテインメント・エデュケーション」があるが、本邦では認知度が低い。多くの一般市民にとって、テレビは第一の健康情報源である。本研究では、既存のテレビドラマやドキュメンタリーの効果を検証するとともに、保健医療課題を伝えることのできるドラマや映画の製作を目的として、ドラマ・映画制作関係者対象教育プログラムを開発することを目的とした。

3. 研究の方法

1) エンターテインメント・エデュケーション研究動向

論文データベースで医療ドラマに関する研究論文を抽出し、研究内容によって、ドラマ登場人物の表象、視聴者の特性、視聴者の知識や態度・行動との関連性、視聴者への影響に分類した。また、これらの研究の基幹となる理論についても分類した。

2) テレビドラマ視聴者への効果検証

非医療系の大学生73人に、医療ドラマ「ドクターX～外科医・大門未知子」の医師-患者間コミュニケーションシーンを視聴してもらい、視聴者の医師像の認知（能力、倫理的特性、他者への配慮、身体的魅力、力、社会性、冷静さ）および医師への信頼度の影響を分析した。

3) テレビ・ドキュメンタリーに登場した患者の表象分析

① NHK テレビ・ドキュメンタリー番組における公害と被害者の描かれ方について、2016年度第2回NHK番組アーカイブス学術利用トライアルに応募し、「テレビが描く患者像とその変遷に関する研究」が採択された。NHK放送博物館内研究閲覧室にて、一般非公開のNHKアーカイブスデータベース50年分の映像データをもとに、特に公害の被害者（患者）の表象について、公害発生からの事象に沿って描かれた患者の語りを中心に内容分析を行った。

② NNNドキュメント研究会（代表・東京大学丹羽美之）に参加し、1970年に放映開始した日本テレビのドキュメンタリー番組「NNNドキュメント」が取り上げた健康被害について

て、その番組内容を医薬品等の基礎知識、発生過程、被害者の声、社会的動きに着目し、質的に分析した。

- 4) エンターテインメント・エデュケーション実施団体の組織運営及び教育に関する調査
エンターテインメント・エデュケーションのための教育に資する教材及びカリキュラムの開発・普及のための調査研究を行った。Hollywood, Health and Society (米国)、Global Media Center for Social Impact (米国) および Center for Media & Health (オランダ) の代表者に各 1 時間の半構造化面接調査を行い、メディア制作者への教育や研修などを実施するこれらの団体の組織、教育または研修内容等について記述的に分析した。
- 5) 医療ドラマ制作者へのヒアリング調査
日本の医療ドラマ制作者が保健医療課題を取り扱う際の動機や課題を明らかにするため、現役の医療ドラマ制作者 5 人に半構造化面接調査を実施した。調査時期は 2017 年 7 月～2018 年 4 月で、1 回につき 1 時間程度であった。調査項目は制作の経緯、障壁、医療ドラマ制作者に必要なと思われる知識やスキルなど。逐語録を作成し、帰納的テーマティックアナリシスを行った。
- 6) メディアと医療をつなぐ会の設立及び医療ドラマ制作教育プログラムの実施
保健医療に関するメディアコンテンツ制作に携わる脚本家や放送作家、プロデューサー、ディレクターから、また、医療者からも人材育成の実態及びニーズを幅広く収集するため、ネットワークを構築し、そのプラットフォームとして任意団体「メディアと医療をつなぐ会」を設立した。本プラットフォーム上で、医師から保健医療テーマに沿った講義を提供すると同時にメディアコンテンツ制作側から脚本家、放送作家、プロデューサーから医療ドラマや医療情報番組制作に関する講義を提供した。また、2019 年度は一般社団法人日本放送作家協会とのコラボレーションにより、主に作家及び脚本家志望者を対象とした教育プログラムをセミナー「作家のマナビバ～医療編」で実施した。

4. 研究成果

- 1) エンターテインメント・エデュケーション研究動向
保健医療課題を取り扱ったプライムタイムテレビドラマの研究状況を文献調査から把握した。1986 年から 2014 年に発行された論文は 59 本であった。49.2%はドラマ登場人物の表象に関する研究であった。3.4%のみが視聴者の視聴動機に注目していた。28.8%は視聴者の知識や態度、行動との関連性を検証したものであり、18.6%は影響を検証した研究であった。制作者に注目した研究はなかった。このことから、エンターテインメント・エデュケーション研究はより包括的に行うべきだと考えられた。
- 2) テレビドラマ視聴者への効果検証
視聴者の医師像の認知および医師への信頼度の影響を分析したところ、医療ドラマの外科医の描かれ方によって信頼度を左右する可能性があることが明らかになった。映像クリップに役者の身体的な魅力や、何事にも動じない冷静さ、味覚障害を認めたくない患者への継続した声がけが含まれていたことで、「身体的魅力」や「他者への配慮」、「冷静さ」が視聴後に高まった (いずれも $p < 0.05$)。また、視聴後には外科医への信頼度が高くなった ($p < 0.01$)。イメージ認知と信頼度の関連性は「力」と「冷静さ」以外の項目で高かった。
- 3) テレビ・ドキュメンタリーによる疾病と患者の表象分析
 - ① NHK テレビ・ドキュメンタリー番組のうち「患者」が登場した番組数は 1428 本であった。映像保存されている番組を抽出したうち、少なくとも 1 人以上の患者が主要人物と

して登場する番組は 78 本であった。患者を含む番組の 75.6%は最近 10 年間（2006～2015 年）に集中していた。そのうち、公害や健康危機に関する番組がもっとも多く 17 本であったが、患者の語りが含まれていた番組は 8 本であった。当事者の語りの重要性が今では認識されつつあると考えられる。

- ② 2014 年 12 月末までに放映された番組 2250 本のうち、分析対象番組は「薬害」をテーマとした番組 20 本であった。内訳は、サリドマイド、スモン、薬害エイズ、C 型肝炎、ポリオ生ワクチン、ヤコブ病、B 型肝炎のほか、解熱剤や麻酔薬、陣痛促進剤、抗生物質、ステロイド、気管支拡張剤、放射性検査薬などによる健康被害の被害者の声を取り上げられていた。一方、まったく取り上げられなかった薬害もあり、制作・放送の偏りが見られた。

4) エンターテインメント・エデュケーション実施団体の実態調査

3 団体はそれぞれが独自の運営体制をとっており、各国のメディア産業環境によって、大きく異なることがわかった。運営組織は、2～9 人と団体によって異なり、スタッフのバックグラウンドも学術研究者からテレビ番組ディレクター経験者など様々であった。いずれの団体も、メディア制作者とのコミュニケーションにおいて課題があると感じていた。活動内容は特定の健康行動や課題について、エンターテインメント系メディアへの情報発信を主としているが、その手法は多岐に渡っていた。また、昨今のメディア産業環境の急激な変化により、特にハリウッドでは、ネット系ドラマの制作過程に対応した情報の提供の在り方を模索していることが伺えた。

5) 医療ドラマ制作者へのヒアリング調査

制作動機は、日本社会のジレンマやミステリーを描くため、放送予定枠とキャストが決定したため、医療小説があったためと多様であった。制作開始前には医療に関する学習機会は無く、医師への取材や医学専門書などで自己学習した。制作中の課題として、creative license が挙げられ、医学的な事実とフィクションの境について、医師と制作者との間でギャップがあることがわかった。

6) メディアと医療をつなぐ会の設立及び医療ドラマ制作教育プログラムの実施

メディア制作者及び医療者双方からの視点を検討するため、座談会（①2017 年 4 月 19 日「女性の健康」、②2017 年 7 月 26 日「在宅ケア（医療・介護）」、③2018 年 3 月 8 日「テレビ生活情報番組」）を開催した。各回約 40 人の参加者があった。詳細は「メディアと医療をつなぐ会」ホームページ(<https://becreativeforhealth.org/>)で一般公開している。月刊ドラマに寄稿し、脚本家志望の方への関心を高める活動を行った。2019 年度は主に脚本家や放送作家を対象にセミナー形式で教育プログラムを実施した。「作家のマナビバ～医療編」（一般社団法人日本放送作家協会主催）において、「ドラマは手術室で起きている！」（2月2日）、「ひととがんと向き合うときドラマが生まれる」（4月13日）、「子ども時代の体験は、人生にどんな影響を与えるのか？」（6月1日）、「医療・介護・地域社会の課題～在宅医療があれば、病院がなくなっても人は幸せに暮らせるか？」（9月7日）。各回約 30 人の参加者があった。各座談会やセミナーでは、制作する際の留意点などを提供した。また、各座談会やセミナー後の参加者アンケートによって、いずれも高い満足度が得られ、且つ、患者のストーリーを講義内容に入れておくことで制作者にとっての有意義な創作の種を提供することができたことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Kato Mio, Ono Naoko, Ishikawa Hirono, Okuhara Tsuyoshi, Okada Masafumi, Kiuchi Takahiro	4. 巻 5
2. 論文標題 Lessons learned from previous environmental health crises: Narratives of patients with Minamata disease in TV documentaries as the main media outlet	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Cogent Arts&Humanities	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/23311983.2018.1447780	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kato M., Ishikawa H., Okuhara T., Okada M., Kiuchi T.	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 Mapping research on health topics presented in prime-time TV dramas in ‘developed’ countries: A literature review	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Cogent Social Science	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/23311886.2017.1318477	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 加藤美生, 丹羽美之, 大野直子, 石川ひろの, 上野治香, 奥原剛, 岡田昌史, 木内貴弘
2. 発表標題 テレビ・ドキュメンタリー番組「NNN ドキュメント」における薬害の記録
3. 学会等名 日本リスク研究学会第31回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 浅井文和, 奥原剛, 加藤美生, 上野治香, 木内貴弘
2. 発表標題 医療ジャーナリズムの日米比較 Health Journalism 2018に参加して
3. 学会等名 日本ヘルスコミュニケーション学会第10回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤美生, 河村洋子, 石川ひろの, 奥原剛, 岡田昌史, 上野治香, 木内貴弘
2. 発表標題 医療ドラマの成り立ち：制作者へのインタビュー調査から
3. 学会等名 日本ヘルスコミュニケーション学会第10回学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤美生
2. 発表標題 NNNドキュメントが取り上げた患者の語り
3. 学会等名 NNNドキュメント研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤美生, 河村洋子, 市川衛, 宮脇梨奈, 大野直子, 石川ひろの
2. 発表標題 エンターテインメント・エデュケーション：健康課題解決に向けた医療とメディアの協働
3. 学会等名 第26回日本健康教育学会学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤美生, 榊原圭子, 石川ひろの, 奥原剛, 岡田昌史, 木内貴弘
2. 発表標題 医療ドラマ視聴が非医療系大学生の外科医像に与える影響の検討
3. 学会等名 第9回日本ヘルスコミュニケーション学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤美生、大野直子
2. 発表標題 NNNドキュメントが取り上げた医療
3. 学会等名 NNNドキュメント研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤美生
2. 発表標題 健康・医療分野のリスクコミュニケーション～個人と集団それぞれへの変わらない取り組み
3. 学会等名 第30回日本リスク研究学会年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤 美生, 大野 直子, 石川 ひろの, 奥原 剛, 岡田 昌史, 木内 貴弘.
2. 発表標題 NHKテレビ・ドキュメンタリー番組が描いてきた病いと患者の語り
3. 学会等名 日本ヘルスコミュニケーション学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 市川 衛, 河村 洋子, 加藤 美生, 松平 浩, 奥原 剛, 岡田 昌史, 石川 ひろの, 木内 貴弘.
2. 発表標題 「見るだけで腰痛が改善する」映像の効果検証
3. 学会等名 日本ヘルスコミュニケーション学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 加藤 美生, 大野 直子, 石川 ひろの, 奥原 剛, 岡田 昌史, 木内 貴弘
2. 発表標題 NHKテレビ・ドキュメンタリー番組が描いた公害病・健康危機～リスクコミュニケーションとしての患者の語り～
3. 学会等名 日本リスク研究学会第29回年次大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 加藤 美生
2. 発表標題 平常時におけるメディア・コミュニケーション～医療・健康分野～
3. 学会等名 福島医学会学術研究集会シンポジウム「異分野におけるリスクコミュニケーション事例の俯瞰学」(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 加藤 美生, 大野 直子, 石川 ひろの, 奥原 剛, 岡田 昌史, 木内 貴弘
2. 発表標題 テレビ・ドキュメンタリーが描いた患者像とその変遷～患者の語りが届けるもの～
3. 学会等名 医療コミュニケーション研究会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 丹羽 美之	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 1344
3. 書名 NNNドキュメント・クロニクル 1970-2019	

1. 著者名 石川ひろの	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 144
3. 書名 保健医療専門職のためのヘルスコミュニケーション学入門	

1. 著者名 映人社	4. 発行年 2017年
2. 出版社 映人社	5. 総ページ数 136
3. 書名 月刊ドラマ6月号	

1. 著者名 公益財団法人健康・体力づくり事業財団	4. 発行年 2020年
2. 出版社 公益財団法人健康・体力づくり事業財団	5. 総ページ数 36
3. 書名 月刊 健康づくり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>メディアと医療をつなぐ会 https://becreativeforhealth.org 医療ドラマデータベース（一般非公開）</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	木内 貴弘 (Kiuchi Takahiro) (10260481)	東京大学・医学部附属病院・教授 (12601)	
研究分担者	河村 洋子 (Kawamura Yoko) (00568719)	産業医科大学・産業保健学部・教授 (23804)	
研究分担者	石川 ひろの (Ishikawa Hirono) (40384846)	帝京大学・大学院公衆衛生学研究科・教授 (32643)	
研究分担者	岡田 昌史 (Okada Masashi) (70375492)	東京大学・医学部附属病院・特任講師 (12601)	2018年度まで
研究分担者	奥原 剛 (Okuhara Tsuyoshi) (70770030)	東京大学・医学部附属病院・准教授 (12601)	